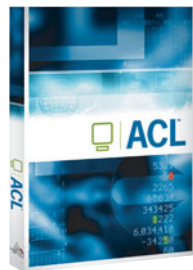


エキスパートに聞く

石原公認会計士事務所・石原佳和氏

内部監査の専用ソフトウェアとして全世界で21万5千ユーザーに利用されている「ACL」。その特徴について、石原公認会計士事務所の石原佳和氏に「実務における監査ツールの有効性」という観点から話を聞いた。



まず石原さんのお仕事についてお聞かせください。

内部監査システム監査に関連するコンサルティングを生業としています。会計監査におけるIT全般統制評価、内部監査全般のアドバイス、企業のシステムデータを分析調査する業務が多いですね。

会計監査・内部監査の業務というのはJ・SOXを境に変わりましたか？

かなり変わったと思います。法制化をきっかけに内部統制という言葉が認知され、多くの方がその重要性を認識し、理解を深めています。監査法人のチャクポイントもこれまでの財務諸表残高から、精細な決算・財務報告プロセスへとシフトしてきましたし、上場企業も内部監査部門を組織して内部統制の経営者評価を行うようになりました。しかしこの経済危機の中で、次年度以降のJ・SOX対応・内部監査をどのように行うかという点では試行錯誤が続いています。また今後、内部監査には、業務効率・法令遵守・資産保全などを目的とした内部統制にも着目していくことが求められます。経済危機以前は、こういった考え方になるにはまだまだ時間がかかると思っていました。業務の効率化が喫緊の経営課題となった今、内部監査により高度な期待が寄せられるのは時間の問題といえます。

J・SOXの中でもITの活用が挙げられています。石原さんはそれ以前から監査用のデータ分析ツールとしてACLを使っていたと伺っています。

監査法人に在籍中、ACLを使う機会を得ました。当時は英語版で取付き難かったのですが、バツと見、ExcelやAccessのような外観とシンプルなメニュー構成で、誰にでも使えそうな感じを受けました。逆にいえば、機能的にも大して変わらないだろうとも(笑)。でも使っているうちにこれは便利だ、監査のためのツールだと感じる様になりました。分析作業というのは非定型で、試行錯誤を繰り返していることになり、ACLを使ってよかったと思えるのは、それらが簡単な操作でストレスなく実行可能なことです。また、操作をスクリプト化できるので、複雑な分析も簡単に再実行できることも大きかったですね。

機能としてはどこの部分が良いと思われるか？

内部統制監査で多用されるサンプルリングが簡単に使えるのは良いと思います。J・SOXにおける25件のサンプルリングは無作為抽出が前提となりますが、ACLには、複数の無作為抽出機能があり、ちゃんと監査実務を考えて作られていると思います。例えば、乱数を利用した無作為抽出を行う際、ACLでは乱数を生成する元としてランダムシードを指定することができます。これは、同じシードを指定すれば何度でも同じ乱数を生成可能です。一見、これで乱数と言えぬのかという疑問もありますが、実際は再現可能性を確保し、選ばれたサンプルが本当に無作為に抽出されたものであることを検証できる非常に便利な機能です。

ACLは、今後の監査の品質向上や効率化を図るうえで必須のツールであると言えますね。

その他に僕がよく使う機能としては、グラフ化やヒストグラム分析が挙げられます。取り込んだ販売データや返品データを週間のグラフにすると月末や期末に売上が伸びていたり、返品は月初に多かったり(笑)と、会社のリズムがわかります。そういう大きな観点から状況を把握した後に詳細な分析に入っていくと、効率的に監査が進みます。

ACLは、ExcelやAccessとどう違うの？と聞かれることも多いのですが、

ExcelやAccessでもある程度のことでは可能ですが、実際にそれでうまくできるのは少ないと思います。監査部門でもETLテラシーの高い方にそういった使命が課されるのですが、そういう人が一人だけでも無理なんですね。結局はその人がいないと監査部門の業務として定着しないわけで、異動や退職で無駄になったExcelやAccessのツールをたくさん見てきました(笑)。ACLは、監査用に機能が単純化されているうえ、操作ログが記録できるので、前の担当者の操作ログを保存すれば、ノウハウの蓄積が図れることがメリットですね。

また、巨大なデータが扱えやすく、分析スピードが速いため、計算中にイライラ待たずに済みます。他には、ExcelやAccessは、取込んだデータや中に書き込んだ式が簡単に変更できてしまします。これでは証拠資料の信頼性が失われてしまいますから非常に怖い。ACLは、元データをリードオンリーでしか開きませんので、誤って書き換えることが無いというのにも監査の信頼性を高くしていると言えます。また先ほど少し述べた操作ログは、監査調査に貼り付けることで監査記録として利用することができます。

最後に監査実務を担当される人にとってACLはどのような位置づけのものになると思われませんか？

ACLは、今後の監査の品質向上や効率化を図るうえで必須のツールであると言えますね。例えば、J・SOXで言われる25件のサンプルリングは、みてみれば25マスのモザイクのかかった画面で全体を眺めるようなものです。日本企業がすでに達成している業務品質から考えても、より効果的に監査するためには、サンプル数を増やす(モザイクを細かくする)か、疑わしい取引や問題点を効率的に見つける方法を身につけるしかないわけです。現在の経済状況を考えて、監査に必要な以上のコストをかけることはできませんから、後者のようなスキル向上が唯一の選択肢だと思っています。

ACLを使えば、監査業務の効率化や時間の有効活用、さらに監査の多様化も可能になるでしょう。今までITツールを使わずに監査業務をされてきた方にはちょっと敷居が高いように思われるかもしれませんが、Excelが普通に使える方なら、それほど難しくはありません。ぜひ触らせてみることをお勧めします。



石原佳和 いしはら よしかず

大阪生まれ、あす監査法人退職後(株)プロテクトジャパンの立ち上げに参加。J・SOX・内部監査高度化支援業務に従事。シニアマネージャーを経て、2007年10月石原公認会計士事務所を開業。公認会計士・内部統制評価指導士。「O&A監査のための統計的サンプリング入門」(共著) <http://www.ishihara-ops.jp/>



Smart Software, Smarter Deployment
株式会社エージーテック

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-21-1 昭栄神田橋ビル3F PHONE:03-3293-5300 (代表) FAX:03-3293-5270
www.acljapan.com